

地誌学と地域研究の在り方に関する日本的解釈の展開

中山 修 一*

Japanese Perspectives on Regional Geography and Area Studies

Shuichi NAKAYAMA*

目 次

はじめに

論議

I. 地誌をめぐる論議

1. 戦後から1950年代：戦後の復興期
2. 1960年代, 70年代：高度成長期
3. 1980年代：安定成長の時代
4. 1990年代：社会システム再編の時代

1. 石田龍次郎教授退官記念コロキウムにおける「地域研究と地理学」論議

2. 経済地理学会秋季研究集会シンポジウム「海外地域研究の成果と方法」での議論

II. 地域研究はどう定義づけられたか

1. 1960年初頭の議論
2. 1980年代初頭の議論

IV. 若干の議論—まともに代えて—

1. 地誌の存在基盤：地誌を書くことの意味
2. 地誌の方法論上の特徴
3. 曖昧な表現に決別を
4. 地誌学の定義

III. 地理学界での地誌・地理・地域研究に関する

はじめに

このたびのシンポジウムで、標題について問題の整理を試みようとするのは、筆者のかなり以前からの二つの疑問に、少しでも接近できるのではないかと考えたからである。第1の疑問は、日本で地誌あるいは地誌学と言うとき、その用語としての地誌は、地理学研究者のアカデミック・コミュニティにおける隠語にも似た、一種の幻想に過ぎなかったのではないかと、という点である。第2は、地域研究の本家は地理学にあり、とする考えは、一見正当な主張のように見えるが、実は地理学界の曖昧な思い込みに過ぎないのではないかと、という疑問である。

筆者が「地誌」あるいは「地域研究」の課題に、まともに出会ったのは、広島県史：地

* 広島大学大学院国際協力研究科 ; Graduate School for International Development and Cooperation, Hiroshima University

誌編の原稿取り次ぎ窓口になり、広島県史編纂室と接触するようになった1970年代初めであった。この頃、編纂室長と交わした会話は、今でも鮮明に記憶に残っている。その第1は、県史編纂は、県の事業であるから、県行政の批判が強く出るようだと困る。また、第2として、県史編纂の趣旨に照らし、県の目で原稿の全体を読ませてもらう、というものであった。この時、県行政の一環として編纂される「地誌」の執筆には、あらかじめ随分と明確な枠組みがはめられていることを実感させられた。

また、同じ頃参加したインドの地理学的グループ研究において、その基本的立場は、動態地誌的研究である、とされたこととの出会いも鮮烈な印象として残っている。さらに、地誌のどうあるべきかを問いかけられたのは、日本地誌研究所が編纂した『日本地誌・岡山県・広島県・山口県』の執筆メンバーに参加した1970年代の半ばであった。当時、地誌は地理学の目標であると一般的に言われていたのだけれども、筆者が担当していたのは、広島県のごく一部の現象としての「地域開発」の項目であった。この割り当てられた範囲で地誌を書くということは、どうあるべきか、に悩まされることになった。

さて、日本における地誌学と地域研究の在り方を議論しようとする際、少なくとも次の2つの作業仮説をたてるのが可能だと考える。その第1は、日本において地誌学と地域研究とは、その研究の対象が「ある地域の諸現象」であるとするところに最大公約数的共通点を認めるものの、その目的と方法においては明らかに相違している。第2は、「地誌」という用語そのものが、とりわけ日本の地理学界では曖昧な合意のまま今日に至っている。具体的には、ある地理学研究者が「日本の地理」と表現する場合と、また、ある研究者が「日本の地誌」と表現する場合に、執筆者はともかく、受けての読者がどれだけ明確な概念、あるいは内容の違いを意識できるのだろうかという点である。

そこで本論では、上の作業仮説を検証するために、次のような手順をもって日本における地誌学と地域研究をめぐる議論に着目し、その時代背景に注目しながら比較考察し、両者の類似点と相違点とを明らかにすることを試みた。

考察手順の第1は、地誌(学)について、日本の地理学分野の研究者がこれまでに展開した主要な議論を整理する。第2に、日本での「地域研究」についての基本的議論を概観する。そして、第3に、日本では地理学領域の研究者が、「地誌」と「地域研究」をどのような関係に相対化しようとしたのかを整理する。

なお、上記のとおり、本論では、地誌の日本の特殊解釈論があるとの仮定で議論を進めることにした。したがって、一般論としての地誌学の起源論や外国での地誌学論については、敢えて参照していないことをお断りしておきたい。

I. 地誌をめぐる論議

第二次世界大戦後の日本において、地誌あるいは地誌学をタイトルに付した主な研究書（単行本）を上げると、能 登志雄（1949）、上野 登（1972）、大獄幸彦（1989）、長谷川典夫（1994）、谷岡武雄・浮田典良・正井泰夫編（1994）などがある。このうち能（1949）および上野（1972）は、地誌（学）研究の本質的議論に挑んでいる。しかし、その他は、地誌（学）的研究には、このような事例がある、ということを示すことを主目的とし、分類学的アプローチをしているところに特徴がある。ただ、いずれも「地誌（学）」と「地域の研究」、あるいは「地域研究」は、同一の土俵の上にとりかえる立場か、それに近い立場をとり、注意深くその厳密な相違点を見い出そうする試みを避けているかの印象を受ける。

そこで上記のいわゆる「地誌学書」を年代順に概観し、地誌（学）に関する考え方が、時代とともに、どのように変化してきたのかを整理したい。ただ、それだけでは、やや材料不足なので、その他、同時代の論文なども合わせて参照し、時代による「地誌」観に関する特徴を明らかにしたい。なお、以下の本節での下線は、筆者が注目する用語に付した。

1. 戦後から1950年代：戦後の復興期

能 登志雄（1949）『現代の地誌学』は、第二次世界大戦を敗戦で迎えた日本が、新しい大学制度へ移行する直前に、本格的に「地誌」の本質を論じたものとして特筆される。同書が論じる地誌に関する見解を抽出すると、以下の通りとなる。

△「この地域性に総合された性格が、地理学そのものである地誌学の対象となる。」（p.59）

△「（ヘットナー流）の地域性の研究は地誌学であるから、地域論にあつては、地誌学が地理学そのものである。」（p.61）

△「地誌学にとっては、まず地域区分が最も重要なテーマでなければならない。地誌学にとって地域区分は、その出発点であると同時にその結論である。」（p.85）

△「地理学にとっても、またその一部門としての地誌学にとっても、…」（p.57）

△「アメリカの地理学者の書く地誌からは、…彼らも地誌 Regional Geography という言葉を意識的に避けて、地理 Geography という語を好んで用いて居る。」（pp.73-74）

上の見解は、以下のとおり、まとめられよう。(1)地理学＝地誌学、(2)地誌学＝地理学の一部門、(3)地誌学＝地域性の研究、(4)地誌学のテーマ＝地域区分、(5)地誌は地理学者が書くもの、となる。

ここで注目されるのは、地理学と地誌学を同一のものと言っておきながら、別のところでは、地誌学は地理学の1部門と言い、概念の定義の厳密さを欠き、統一的に説明されていない点である。

このように「地理」と「地誌」を同一視するかのような能（1949）の見解に類似のものとしては、次の定義を上げることができる。ただ、注目しておきたいのは、このいわゆる同一視的規定は、その使い分けを明確にできていない点に、大きな欠陥を持っていたと言える。

△「現在でも地誌が、地理学の核心（core）であり、目標（goal）であるとする意見は、多くの学者によって支持されている。」（辻田，1957，p.76）

△「地理の核心というのは、やはり地誌であって、」（浅香・入江・竹内・中野，1959，p.20）

△「その地域性を明確に浮彫りするような科学的地誌は、今日、世界的に見てもきわめて数が少ないといわなければならない。」（辻田，1957，p.81）

△「（地誌が）出版されるとか、まとめられる場合には、それがでてくる時代的な背景というもの、その国の具体的な背景というものが理解されていなければ、妥当であるとか、地誌のありかたとかの批判はできないと思うのです。」（浅香・入江・竹内・中野，1959，p.14）

△「地誌を読むと、地域発展の原動力をつかむことができ、地域の改善・発展にも資し得るということになるのですね。」（浅香・入江・竹内・中野，1959，p.18）

△「系統地理学と地誌学は車の両輪のようなものであり、系統地理学の研究なくしては本当の説明的な地誌はできないと思って居ます。」（浅香・入江・竹内・中野，1959，p.20）

△「地域間の諸現象を解体し、分析し、ふたたび総合するということは、地誌学の本質的命題にちがいはない。」（水津，1959，p.59）

2. 1960年代，70年代：高度成長期

まず60年代初めの、上野 登（1962）『地誌学の原点』に見る地誌の捉え方を整理すると次のとおりである。

上野（1962）は、第4章「地誌論体系化への基本的視点」の1節「地誌学と一般地理学の統一視点」の中で、「一般地理学は地理学固有の法則性を究明するものであり、地誌学はその法則性に立脚して地域的特性を究明するものである、という一般的説明をすることは容易であるが、それを具体的体系にまで高めた説を見い出すのは容易ではない。」（上野，

1962, p.149) とした上で、自らの規定をつぎのとおり展開した。

△「地誌学は、一般地理学が究明する社会発展の弁証法的過程、すなわち生産力の発展に対応して変化していく人為的環境の姿を、地域的人間集団の主体的実践的活動を基本視点にして具体的・現実的に研究する科学である。」(上野, 1962, p.158)

△「地域の研究, つまり地誌は、地域の諸経済的・文化的現象の有機結合のメカニズムを通じて地域を理解するとともに、その地域の社会的特色を明らかにする学問である。そして、地誌の理論とは、そのメカニズムの理論である。」(藪内, 1968, p.44)

上の見解の特徴は、(1)地誌学を社会科学的な用語を用いて規定しようとした。その規定の仕方は、(2)地誌学は、生産力の発展に対応して変化していく人為的環境の姿を、地域的人間集団の主体的実践的活動に視点をおき、具体的に研究する。したがって、(3)地誌の理論は、そのメカニズムの理論であるとする。

しかし、この60, 70年代にあっても地誌の概念規定の大勢は、やはり伝統的な言い方が多かった。その事例には以下のものがある。

△「地理学の一分野に地誌があり、…地域の総体を破壊しようとするものである。」(石田, 1967, p.1)

△「地誌は、地理学の応用部門の一つであり、しかも古くからあった応用部門である。」(内藤, 1971, p.76)

△「地誌は地理学の本来の目的であって、地理学のあらゆる分野の研究がこの地誌に奉仕するものである。」(大野, 1961, p.34)

△「地誌学は、…地域のもつ特色—地域的性格—地域性Regional Characteristics, Regionality, Ortlichkeit を解明することを目的としている。」(二神, 1965, p.59)

△「地誌は、地域の多様な事象に目を向けて、百科辞典的羅列の非科学を非難されてきた。全事象の上の“地域性”と“地域構造”に焦点をおけば、羅列性を脱却して地誌独自の分野をもち得るのである。」(岡本, 1971, p.1)

△「地理的事象の実証的研究は、すべて地誌学にならざるを得ない。そして、その研究結果を分野別に系統的に整理したものが、系統地理学であり地域別に整理したものが、それぞれの地域の地誌であるというにすぎない。」(高野, 1979, p.8)

△「地誌とは、地球表面をある区域にくぎって、その中の種々な状態を説きあかそうとっている。」(三野, 1960, p.40)

△「地理学やその他の諸科学による地域研究の成果を含む地域に関する知識・情報が、一定の観点にしたがって、整理され組み立てられたものが、ここでいうところの地誌であ

る。(内藤, 1971, p.75)

上の見解は、それぞれが地誌に関し若干のニュアンスの違いを示し、一元的な概念規定が、依然として定まっていないことを表わしている。上の規定を整理すれば、以下のとおりとなろう。(1)地理学の一分野＝地誌。(2)地誌＝地理学の応用分野の一つ。(3)地誌学は、…地域のもつ特色—地域的性格—地域性を明らかにする。(4)地誌は、地域性と地域構造に焦点化。(5)地理的事象の実証的研究＝地誌学。(6)地誌＝地球表面を区切り、状態を説き明かす。(7)地理学や地域研究の成果が、体系化されたもの＝地誌。

このように見ると、上野(1962)のように、地誌を社会科学用語を用いて概念規定することは例外的で、決して一般的に受け入れられることはなかった、と言えよう。

しかし、石田龍次郎(1966)が指摘した地誌に関する日本の解釈は、極めて重要と考えられる。そこでは、「いかなる古代民族も文化が一定の段階に達すれば、自己と自己以外のものを区別し、自民族の来由に関する時間的認識から歴史的知識を、空間的認識から地理的認識をもつにいたる。しかし、それが文字に記述されるのは、地理学・歴史学等の学問的興味からではなくて、おそらくある必要性あるいは必要なる政治的意図の方が強かったであろうと思われる。」(p. 4)とした。筆者は、この見解に強い共感を覚える。

3. 1980年代：安定成長の時代

この時代、地誌をめぐる議論は、一休み状態に入り、決して活発とは言えない。それは日本社会が全体として経済の低成長時代に入り、日本の社会システムの見直しがあらゆる場面で進みはじめる時代に一致している。こうした時代背景の中で、大獄幸彦(1989)『地誌学研究法序説』が注目される。

大獄(1989)は、第1章「地誌学研究序説」の1節「地理学における地誌学の地位」において、地誌学のねらいの一つは、「未知の土地と人々への夢なり空想をかきたて、そういった事象を知ったことで心豊かになることにあるように思われる。また、知らない土地へ旅行してみたい、すんでみたいという人間本来の欲求を人々に引き起こすことにもあろう。」(p.22)と、情緒的な概念規定を試みたところに特徴がある。

上の規定を捉え直せば、地誌学は、未知の世界についての情報を記述すること。しかし、その書かれたものが、読者の未知の世界への移動欲求を刺激し、行動を導き出すようなもの、とされる。この捉え方は、地誌学の存在価値を分かりやすく表現したものであり、むしろ古典的とも言える地誌の社会的効用を引き出して、一般の理解を求めたものと評価できよう。

なお、この時代、大学レベルの教科書として書かれた地誌学書に、北村嘉行（1981）『地理と地誌学』がある。しかし、そこでの地誌の説明に採用された周知のハーツホーンの地誌（地域地理学）と系統諸科学との関係を示す図（p.16）からは、だれがその現実的成果を予想できるであろうか。この説明図は、地誌が地理学者による夢であることを思わせる、何ものでもない。

4. 1990年代：社会システム再編の時代

この時代には社会の多様なシステムで、根本的な見直しが始まった。こと地理学とその周辺に目を向ければ、一方で大学改革の一環として地理学専攻の解体と再編が進みはじめ、他方で学習指導要領の改訂（1989年）に伴う、高校地理の後退への危惧が高まってきた。

こうした中、徐々に地誌学をタイトルに付した専門書として出版されたのが、長谷川典夫（1994）『地誌学研究』であった。そこでの地誌をめぐる概念規定に関わる要点を抽出すると、以下のとおりである。

△「地誌学ChorographyまたはChorologyは近年は Regional Geography（地域地理学）と呼ばれることが多く、またドイツでは Länderkunde が使われることが多い。」（p. 7）

△「地誌学は地理学の一部として、…」（p. 7）

△「現在多くの地理学者は近代地理学の核心は地誌学にあり、地理学の本質をそこに求めているが、その重要性の認識がおくれたのは、1つには地域を画定し、境界を設定する場合の標準を欠いていることに理由を求めることができるが、他の1つは、自然環境に対する人間生活の相関関係の記述方法に欠陥があったためでもあろう。」（p. 7）

△「フランス、ドイツ、アメリカ合衆国などでは、地誌学について独自の方向に進み、…」（p. 8）

この長谷川（1994）の指摘には、注目すべき点が多い。まず、地理学の本質は、地誌学だと言う古典的解釈を継承し、再確認していること。この点は、極めて重要である。なぜなら、地理学という一つの学問領域の本質を説明するのに、異なる名称、ここでは「地誌」であるが、を付した「地誌学」があると言う説明の奇妙さに気付いていない。この点をさておけば、評価されるべき指摘として、2点が注目される。その第1は、地誌学の重要性の認識の遅れの原因として、①境界設定の標準化の未完成、②自然と人間の相互関係の記述方法の欠陥、と言う2点を指摘したこと。第2に、地誌学は国による発展に違いがあることを認めた点である。つまり、地誌（学）の概念は、国による解釈に相違があることを、明示している。この点は、筆者の本論の立場、つまり日本には固有の地誌学観が存在する

という、と同一の視点に立つ見解と言える。

ところで、1990年代には、谷岡武雄ほか編（1994）『新訂世界地誌の研究と教育』にも注目させられる。これは17人の著者による大学レベルの教科書として性格づけられる。この中で地誌の概念に当たる議論で、次の2か所を取り上げておきたい。

△「地誌とは本来小説と同じように個性的なものであり、全世界に、全時代に通用するものなどあるはずがない。書く者、読む者の世界観の数だけの地誌があるはずである。」（佐々木博：p. 5）

△「イギリスの地理学者故スタンプ卿が、「地理学は、哲学・科学・芸術」と言ったその芸術性は、地誌においてこそ生かされねばならない。これは決して美辞麗句を連ねることではなく、平易な叙述でありながら、地域の個性をしみじみと読者の胸に運び込む、「心から心へ」(Heart to heart) という記述の中に、ほんとうの地誌の姿が浮かび上がるのではなかろうか。」（辻田右左男：p.85）

上の見解が地誌に関心を示す可能性のある学生に与える影響を考えると、実は深刻な問題を含んでいることを指摘しなければならない。つまり、上の佐々木と辻田の地誌の概念規定を合体させると、地誌とは、地域の個性を小説と同じように、著者の心の赴くままに書き、それが読者の心にしみじみと伝わるようなもの、となる。

これが戦後、能（1949）にはじまった、地誌学の在り方をめぐる議論の一つの結論であるとされるのであろうか。これをもし、結果論として現代の地理学界における有力な地誌の定義と認めるならば、地誌は地理学の一分野であると言う古典的規定に帰結したことにもなるし、科学的地誌の主張を放棄したことにもなる。

なお、1990年代初頭、上のほかにも教科書としてまとめられた地誌学書に、杉村暢二（1990）『教養の地誌学』がある。

II. 地域研究はどう定義づけられたか

「地域研究の本家は地理学である」、と主張することは正しいのであろうか。これに対する答えは簡単なようで、実はそうではない、と考える。地域研究は、明らかに地理学とは異なる目的をもって、しかも地理学の歴史に比べれば、最近にこの世に生まれた新しい研究領域と見るのが正解であろう。

ここでは、地域研究について地理学界の外で行われた二つの定義をみることで、かなり重要な論点が検証できるものとする。第1は、『学術月報』（1963年2月号）誌上での特集「地域研究」における議論である。第2は、学術審議会学術国際交流特別委員会（1980）

の審議のまとめ「地域研究の推進について」である。ここでは前者を1960年代初頭の議論、また、後者を1980年代初頭の議論として取り上げ、それぞれの特徴を検討することにした。両者には、約20年の歳月の開きがあるが、共通に言えることは、両者の議論とも地域研究の全体像は、ある程度、明示されているが、目的や意義が曖昧であることである。

1. 1960年初頭の議論

『学術月報』2月号は、特集「地域研究」を組んだ。その巻頭言「科学者のことば」で、一又正雄（1963）が「地域研究と日本の科学者の使命」をまとめている。その内容は、「わが国の地域研究の現状が打破せられ、その研究体制がととのったあかつきには、特に、アジア、アフリカ研究の分野では、画期的な躍進を約束するものである。植民、統治、戦略の一切からまったく離れた日本の地域研究の平和目的は、人類の福祉のため、特に、生まれながらにして自然の重いハンディキャップをせ負わされたアジア、アフリカの人々の生活向上に直結するのである。」（一又、1963、p. 1）

当時の学界の状況は、1950年代後半に戦後の経済復興の進展に伴って、財界支援による海外学術調査がはじまり、さらに1963年からは文部省の科学研究費に海外学術調査の枠が新設され、文部省支援の海外学術調査が、本格的にスタートした時期であった。

したがって、『学術月報』誌上での特集は、戦後の日本人による地域研究、とりわけ海外におけるそれを国の科学政策として再開するための開始宣言であった、と言える。そのため、上述の一又（1963）は、すこぶる気負った側面をのぞかせているものの、その目的を「人類の福祉」と「アジア・アフリカ地域の生活向上」に絞った点に特徴を見ることができる。なお、この特集では、地域研究に関する諸外国の現状の議論が中心で、その在り方、目標や方法などに関する本格的な議論は、取り敢えず避けられている。

2. 1980年代初頭の議論

この時期は、学術審議会が、日本における地域研究の在り方について、公式見解を示した点で大いに注目されよう。

学術審議会学術国際交流特別委員会は、「地域研究」の定義をつぎのとおり表明した。「ある地域について自然環境を含めて、その社会、文化を全体として深く理解することを目的とする、学際的、総合的な研究である。」。また、地域研究を発展させることの意義は、「異文明・異文化への関心と理解が深まり、我が国が諸外国との共存を図っていくうえで重要な基礎が築かれることが期待される。」（p.68）

さて、上の定義を要約すれば、日本における地域研究は、日本人の異文化理解を深め、

諸外国と共存を図ることを目的に、ある地域について、自然環境、その社会、文化を明らかにする総合的研究である、となる。

ところで、興味あることに、この定義の仕方に非常に良く似た定義を、太平洋戦争中の有名な地域研究機関であった国立の東亜研究所（1938年9月1日設立1945年解体）の設立目的にも見い出すことができる。柘植秀臣（1979）によれば、「東研は企画院によってつくられた国策のための調査機関」であり、その設立目的は「帝国の海外発展に資するため、東亜の人文及び自然に関する総合的調査研究を行ふ」（p.31）と実に明確であった。上の例は、いわゆる地域研究の目的が、時代の要請でいかようにでも変化できる点に特徴があることがわかる。ここでも地誌学と地域研究とでは、その研究目的に顕著な違いがあることを指摘できる。

なお、多田文男（1969）や石田龍次郎（1969）にも明らかなように、日本における地域研究の起源は、1907年に設立された南満州鉄道株式会社調査部にあった。そして、さらに太平洋戦争時代には、海外地域研究施設として、南方軍調査部や東亜研究所が、優れた研究者と資金を擁して活躍した歴史がある。

さらに言えば、太平洋戦争時代の1942年に創設された、日本地誌学会も看過するわけには行かない。因みに、同学会の創設記念出版、日本地誌学会編（1942）の中で、「地誌学について」を執筆した飯本信之（1942）が、地誌学を「人間生活と自然的所興との相互作用の顕現と結果とをかかせる景域なる対象に於いて把えんとするものである。…中略…、かくてこそ地誌学の研究は国家の要求に添い之を真に景域において生かし得るのである。」と定義した。ただ、飯本氏は、最近、竹内啓一、正井泰夫編（1986）において、自らが日本で最初に本格的な地理学の定義をしたと述べているのは、記憶違いをしていると言えよう。因みに竹内・正井編（1986）では、地理学とは「自然と人間との相互作用の顕現と結果とを、景域的観念から叙述および説明する学問」（p.137）としている。太平洋戦争時代には、地誌学の定義とした同じものを、半世紀後の1980年代には地理学の定義だとしている。こうした地誌学と地理学の定義の曖昧さは、なんとしても避けたいところである。

III. 地理学界での地誌・地理・地域研究に関する論議

この節の目的は、第二次世界大戦後、日本の地理学研究者が、地誌、地理、地域研究の在り方について巡らした重要な議論について、その要点を整理することである。

ここでは二つの議論の場を取り上げる。それらは、日本の地理学界が戦後、海外の地理学的地域研究をはじめて間もない、1960年代後半に展開された注目すべきものであったと考えられる。日本の地理学研究者は、太平洋戦争中は言うに及ばず、それ以前の日清戦争

後から、東アジアや東南アジア地域において、地域研究に積極的に参画していたことは、前節の多田（1969）や石田（1969）に明らかなおりでである。したがって、いわゆる戦前期の地域研究と戦後の平和憲法下で、1963年から公式に開始された文部省支援の海外学術調査における地理学研究者の立場が、どのように違っているべきかの議論を行なう好機は、1960年代後半期をおいてはなかった。

ここで注目したい議論の第1は、石田龍次郎教授退官記念コロキウム（1967年8月）である。第2は、前記コロキウムの延長線で開催された経済地理学会秋季研究集会（1968年11月）でのシンポジウム「海外地域研究の成果と方法」である。前者では、討論された4つのテーマの一つが、「地域研究における地理学の立場」であった。そこでは、西川大二郎・高橋 彰（1968）が、地理学、地誌、地域研究のそれぞれの性格と相互の関係を明らかにしようと議論を展開している。その結果、地域研究における地理学の独自の方法論は何か明らかにされることの必要性が提起された。それが、後者のシンポジウムの開催へと引き継がれたと考えられる。しかし、解き明かすべき課題は、そこぶる大きかったようである。残念なことにそれらの議論の場では、地域研究における地理学固有の方法論はもちろん、地誌研究と地域研究の関わりについても、明確な合意が得られるにはいたらなかった。

1. 石田龍次郎教授退官記念コロキウムにおける「地域研究と地理学」論議

同コロキウムは、1967年8月14-16日、石田教授の退官を記念して開催された。この会は一般公開を前提としたものではなかったようであるが、その議論の内容についての大要は西川・高橋（1968）にまとめられている。それによれば同コロキウムでは、4つのテーマ；(1)地理学思考へ、(2)地域研究における地理学の立場、(3)集落地理学と歴史地理学の地理学としての性格、(4)経済地理学の理論について、が議論された。そのうち第2テーマにおいて、西川大二郎氏が「ブラジル研究と地理学」、高橋 彰氏が「アジア研究と地理学」を報告している。両者の議論は、自らの海外でのフィールド調査の経験から地域研究と地理学の関わりを説明しようとしたものとされる。

この報告の司会を務めた松田 孝（1968）は、討論を三つの領域で整理した。すなわち、(1)地域研究と地誌の関係、(2)地域研究の目的、(3)地域研究における地理学の目的、である。第1の領域は、このたびのシンポジウムとほぼ同じ問題意識で設定されているが、そこで注目されるまとめは、「地誌を前提においた地域研究というのは、独自の学問として成立しないのではないかという意見が提出された。それは、地誌をつくるということは、教育的観点からは意味のある仕事であるが、学問が法則定立の科学であるという考え方からすると、地誌という学問はなりたたないのではないかということである。」とされる。第2の

領域では、地域研究の目的には、二つの考え方が併立したとされる。一つは、「科学の系統的発展に寄与できないものは、それが単に地域をとりあげているというだけでは地域研究とはいえない」。二つは、「地域研究あるいは地誌を、特殊地域的法則をうちたてるためのもの、社会発展・社会変革の戦術をうちだすもの」とする考え方である。そして第3の領域では、「地理学以外の学問分野の研究者は、自分の学問分野における理論上の問題意識から、一定の作業仮設を、地域の外から持ち込んで研究を行う傾向が強いが、これに対して、地域自体の諸問題を内面的に把握しようとするところに、地理学の地域研究における独自性がある」とされた。しかし、この見解に対しても、調査における技術、態度、姿勢など「学問の領域外のところで独自性を主張しなければならないこと自体が、独自性がないことの一つの証拠」という厳しい批判があったことも指摘する。

結局、多様な局面で二つの考え方が平行線をたどり、全体の合意にいたるものが少なかったことが伺える。ただ、松田(1968)のまとめによれば「他の諸社会科学の研究者と共通の地盤に立つことによって、地理学の独自性を追及しようとする提言に、多くの賛同があつまった」と言うのが参加者の合意点であったことがわかる。つまるところ、同コロキウムでは、地域研究における地理学の独自性は何かとの間に、的確な解答が出なかったことになる。

2. 経済地理学会秋季研究集会シンポジウム「海外地域研究の成果と方法」での議論

同シンポジウムは、前記コロキウムの報告者の一人、高橋 彰氏が地理学研究者による海外地域研究の在り方に関する議論をさらに深めることを意図し、1968年11月に開催された。このシンポジウムの概要は、経済地理学会編(1969)に報告された。筆者も報告者の一人として、同シンポジウムに参加したが、海外地域研究の方法論と意義論の双方で見解が対立し、一つの方向で結論が出なかったことが強く印象に残っている。その際の対立点は、地域研究をめぐるきわめて本質的課題であり、今日に至ってもなお、学界レベルでの合意形成は実現しているとは言えそうにない。

本質論的課題のうち、方法論の対立は、大岩川和正氏と応地利明氏の見解に代表される。前者は、「地域研究の主題は、地域社会の現状をその歴史の総過程において把握すること」。その理由として、「地理学の究極の目標を世界を科学的・体系的に地域社会の視点から説明し記述すること、すなわち地誌の完成であると考えている。」と言う。これに対し、後者は、地域研究とは「ある地域について農業を、あるいは農業をある地域に即して調査すること。」でよいのではないかと言う。

また、意義論の対立は、石田龍次郎氏と大岩川氏とに代表された。前者は、「外国人が

ある国の土地を真に理解し得るか否か。…外国人がやることによって、本質的に別なものが出てくるのであろうか。」と問題を提起する。これに対し、後者は、「科学は本来的にインターナショナルでなければならない。日本人としてという表現が用いられることには反対」と主張した。

以上の議論に見るとおり、1960年代末には、海外地域研究の方法と意義には二つの対立的見解が存在していたことを、事実として認めざるを得ない。

IV. 若干の議論—まとめに代えて—

以上の整理から言えることは、日本の地理学研究者は、社会的に理解されやすい仕方で、地理学と地誌学の概念規定を明確にできていない。また、地誌学と地域研究の違いについてもしかりである。そこで筆者なりに、上の論議の整理を踏まえ、地誌と地域研究とをめぐり若干の議論を展開したい。

1. 地誌の存在基盤：地誌を書くことの意味

地誌は時代の申し子であることは、大野盛雄（1961）や石田龍次郎（1967）にも明確に論じられた。大野（1961, p.38）は、「今日ほど（1961年）日本人が「日本」を知らなくてはならない時はないであろう。」、これに応えるには、地誌の存在があることを述べている。筆者も両氏の地誌に対する視点を支持したいと考える。

個人あるいは社会集団が、自己を時代の変動の中におき、自己や集団の進歩や変化を実感しているとき、身の周りに存在する場所が、それが国内であろうと海外であろうと、どのような地域性（地域特性）を有しているのかについて、深く認識したいという欲望が湧いてくる。この欲求に応え、「地誌」は書かれるものと言えるだろう。つまり、地誌は時代のニーズに基づき地理学研究者が書くものと言える。そうであるなら、地理学研究者は、社会的な欲求を、関連研究分野の研究者と時間差なく敏感に察し、地誌の研究を深めるべく努力を重ねなければならない。

上のように日本で国の内外を問わず、ある地域についての認識を深めたいとの思い、つまり、時代の変動と自己の進歩を実感している時代として、明治時代、第二次世界大戦後、さらに1960年代の高度成長期を当てることができよう。こうした変動の時代、日本では確かにいわゆる歴史に残る地誌が出版されている。その事例を上げることは、決して困難なことではない。

明治時代には、幻の『皇国地誌』の編纂が進められ、そのダイジェスト版として、元正院地誌課編（1982復刻版）『日本地誌提要』が出版された。また明治の末から大正時代の

はじめにかけては、山崎直方・佐藤伝蔵編（1903-15）『大日本地誌全10巻』も刊行された。戦後の「地誌」書の刊行の傾向を見ても、時代性の反映が明瞭に見られる。とりわけ、日本地誌研究所編（1967-80）『日本地誌全21巻』の刊行は、新憲法下の日本の発展の姿を記録にとどめ、日本の国土に生きる人々のアイデンティティーを明確にするために必要な、歴史に残る大事業であった。

2. 地誌の方法論上の特徴

いわゆる地誌には、その方法論上、顕著な特徴が見られるようである。第1は、研究対象としての場所の境界、領域の設定が、他の学問分野に比べて極めて明確であることであり、第2に、対象の場所や地域に関する自然地理的現象への理解とその特徴の説明が明確にできていること、であろう。

3. 曖昧な表現に決別を

日本の地理学界において、地誌学を地理学の一分野だとか、あるいは地理学の究極の目標だとか、さらには地理学そのもの、などと言ってきた曖昧さに、この際はっきりと決別すべきであろう。そして、どうしても地誌学の独自性を主張しようとするなら、地誌学と地理学を極めて近い親戚領域と性格づけ、地誌学に新たな定義を与えるべきであろう。それは、もちろんいわゆる地域研究の目的とも異なるものになるだろう。

4. 地誌学の定義

以上の議論を踏まえ、地誌学の独自性を主張するには、次のような定義を当てることが可能ではないだろうか。つまり、地誌学とは、「地理学あるいは関連分野の成果を利用し、地域の特性を科学的に描くこと」。その意味で、目的、対象（場所のあるいは地域の特性を描く必要性のある領域が明確である）、方法（地理的＝場所的＝地名的データ、情報に基づく科学的説明がなされること）はすでに確立している。したがって、地誌は学としての体系をもっている、と言える。また、同時に地誌学は、地域や住民のアイデンティティーの明確化を目標とする学問であり、いわゆる地域研究のように問題解決型、あるいは問題発見型の学問とは基本的に性格が異なることを、優れた地誌の作成をもって主張すべきであろう。

しかし、こうした地誌学の独自性を主張するのは、日本固有の伝統であり、国際的にその存在意義を主張することにこだわることもなかろう。地域や住民のアイデンティティーの形成の方法は、国により文化によって違いが生じるのは当然であるからである。つまり

ところ、日本の地理学研究者が書く、「日本の地理」と「日本の地誌」が同じような内容で、分かりやすい区別がいつまでも出来ないでいるなら、用語「地誌」に決別し、「地理」一つに統一することのほうが社会的には理解されやすくなることを、自戒の念を込めて結論としたい。

文 献

- 浅香幸雄・入江敏夫・竹内常行・中野尊正（1959）：日本地誌の課題－座談会－。地理，第4巻第1号，pp. 9－40.
- 飯本信之（1942）：地誌学について。日本地誌学会編：『日本地誌学I』中興館，pp.95－96.
- 石田龍次郎（1966）：日本における地誌の伝統とその思想的背景。地理学評論，第39巻第6号，pp.348－356.
- 石田龍次郎（1967）：皇国地誌の編纂－その経緯と思想－。一橋大学研究年報－社会学研究，第8号，pp. 1－61.
- 石田龍次郎（1969）：日本人の海外調査の展望－戦前戦中における地理学者の業績。地理，第14巻第1号，pp.37－47.
- 一又正雄（1963）：地域研究と日本の科学者の使命。学術月報，第15巻第11号，p. 1.
- 上野 登（1962）：『地誌学の原点』大明堂，240p.
- 大獄幸彦（1989）：『地誌学研究法序説』大明堂，152p.
- 大野盛雄（1961）：地誌に期待するもの－日本地誌について－。地理，第6巻第1号，pp.33－38.
- 岡本兼佳（1971）：地誌学への論理－ラテンアメリカ地誌研究－。地域研究，第15巻，pp. 1－10.
- 学術審議会学術国際交流特別委員会（1980）：地域研究の推進について（審議のまとめ）。学術月報，第33巻第1号，pp.68－69.
- 元正院地誌課編（1982復刻版）：『日本地誌提要』臨川書店，503p.
- 北村嘉行（1981）：『地理と地誌学』八千代出版，248p.
- 経済地理学会編（1969）：学会記事：経済地理学会秋季研究集会（1968年11月1日）。経済地理学年報，第15巻第1号，pp.94－106.
- 佐々木 博（1994）：人間集団の世界観と比較地誌。谷岡武雄ほか編：『新訂・世界地誌の研究と教育』大明堂，pp. 3－13.
- 水津一朗（1959）：ヨーロッパ地誌の一断面。地理，第4巻第1号，pp.56－69.
- 杉村暢二（1990）：『教養の地誌学』大明堂，179p.
- 高野史男（1979）：日本海沿海地域考－地理的事象の本質について－。地域研究，第20巻第1号，pp. 1－10.
- 竹内啓一・正井泰夫編（1986）：『地理学を学ぶ』古今書院，378p.
- 多田文男（1969）：戦前の海外調査。地理，第14巻第1号，pp.32－36.
- 谷岡武雄・浮田典良・正井泰夫編（1994）：『新訂世界地誌の研究と教育』大明堂，187p.
- 柘植秀臣（1979）：『東亜研究所と私－戦中知識人の証言』頤草書房，282p.
- 辻田右左男（1957）：地誌研究史。藤岡謙二郎編『人文地理学研究法』朝倉書店，pp.76－83.
- 辻田右左男（1994）：風土記から出発した日本の地誌。谷岡武雄ほか編：『新訂・世界地誌の研究と教育』大明堂，pp.75－86.
- 内藤博夫（1971）：地誌について。西川 治・河邊 宏・田辺 裕編『地理学と教養』古今書院，pp.74－77.
- 西川大二郎・高橋 彰（1968）：地域研究における地理学の立場。地理，第13巻第1号，pp.25－30.
- 日本地誌学会編（1942）：『日本地誌学I』中興館，352p.

- 日本地誌研究所編 (1978) : 『日本地誌 第17巻 岡山県・広島県・山口県』二宮書店, 625p.
- 能 登志雄 (1949) : 『現代の地誌学』古今書院.
- 長谷川典夫 (1994) : 『地誌学研究』大明堂, 184p.
- 二神 弘 (1965) : 地域矛盾論—現代地誌学への approach —. 福岡学芸大学紀要, 第14号, pp.59-66.
- 松田 孝 (1968) : 討論のまとめ. 地理, 第13巻第1号, pp.30-32.
- 三野与吉 (1960) : 地誌 (地方誌) Regional Geography, Erdkunde について. 地理, 第5巻第4号, pp.40-45.
- 藪内芳彦 (1968) : サモアの調査記録. 地理, 第13巻第2号, pp.40-46.
- 山崎直方・佐藤伝蔵編 (1903-15) : 『大日本地誌』博文館, 1-10巻.